

戦場と化する米国——過度に軍隊化した米警察（ACLU 報告）

June 24, 2014

Russia Today



武器も心構えも米軍を踏襲した警察が、アメリカの道路上の安全を確保する手段だとして、軍隊化し“超戦闘的”になりつつある。この新しい調査報告は警察に対し、人民を“戦時下の敵”として扱わないよう呼び掛けている。

イラク戦争で海兵隊として服役したが、帰国してアリゾナ州タスコンの自宅で、“味方による射撃”で死んだ Jose Guerena 21 歳の話が、全国に知られて不安を煽っている。

2011 年 5 月 5 日朝、ゲレナの妻は、奇妙な物音を聞きつけ、一人の男の影が家の外に立っているのに気付き、彼に警告した。ゲレナは妻と子供を押し入れに隠し、銃を掴んで偵察した。これが命取りの間違いとなった。特殊部隊チームがゲレナに発砲し、彼は沢山の銃痕を受けて台所で死に、手当を受けることもなかった。

あとでわかったのだが、この特殊部隊はこの近所のたくさんの家を家宅捜索し、出てきたのはマリファナの小さな袋一つだった。どんな麻薬もゲレナの家からは出てこなかった。

この特殊部隊（SWAT、特殊兵器戦術部隊）は 1960 年代後半に“準軍隊”ユニットとして、暴動、人質事件、銃乱射などの緊急事態を扱う目的で設けられ、それ以来よく出動し、「彼らの本来の目的ではない目的に、ますます頻繁に使われるようになった——圧倒的に、麻

薬捜査の捜査令状に従って行動する仕事である」と、「戦争が本国で起こる：米警察活動の過度な軍隊化」と題する ACLU（米市民的自由団体）報告（リンク）は言っている。

この報告は、2010年7月から昨年10月までの、11の州の20以上の法執行機関による818件のSWAT作戦行動を研究している。

今日、準軍事部隊は、国内で米市民を助け保護するよりは、外国でテロリストと戦うのに適した装備をしていて、「無用の暴力」に備え、米市民を「戦時の敵」扱いするための、新しい能力の暗黒の一章になりつつある、とこの研究は述べている。

98ページに及ぶこの文書は、州と地方法執行機関の軍隊化、「ほとんど全く公的な議論や監視なしに兵器や戦術」を供給する、高額な連邦プログラムの黙認について詳しく論じている。表向きは麻薬との戦いを目指すものだと称するこの戦略は、バックファイアを起こし、市民の間に恐怖と不和の種を植えつけ、多くの人々は警察を犯罪者と同じくらいに恐れ始めている。

米軍が、アフガニスタンとイラクで軍事作戦を展開している一方で、地方警察軍は米軍からの“お下がり”をそのまま使っている。そのため、いくつかのアメリカの地域は、まるで新しく占領されたばかりの町のような様相を呈し、警察隊は戦闘服を着、自動小銃を携えて、大通りを装甲車に乗って巡回している。

「連邦の資金を使って、州と地方法執行機関は、失敗した“麻薬との戦い”を遂行するという名目で軍需物資を蓄えてきた。…しかしこれらの軍需物資は、決して諸々の共同体にとってコストなしでは済まされない。それどころか、この超攻撃的な道具と戦術の使用は、市民と警官にとって悲劇であり、無用な暴力のリスクを募らせ、私有財産を破壊し、個人の自由を覆すものだ」と、報告は述べている。



地方の警察軍に対して政府から与えられている奇妙なハードウェアの一つは、対地雷装甲車（MRAP）で、これは即製の爆破装置から部隊を保護するものだ。メディアの協力によって ACLU は、今こうした装甲車をもっている町の数約 500 としている。その幸運な都市としては、テキサス州ダラス、カリフォルニア州サリナス、それにユタ・ハイウェイ・パトロールにまで与えられている。

この報告によると、オハイオ州立大学警察までが MRAP をもっており、これはこの大きなサッカー大会の間、“プレゼンス”を誇示するためだという。

その結果として明らかなのは、ある気懸りである——「もし連邦政府が警察に、軍隊式の兵器という大きな隠し財産を与えるならば、彼らは使う必要のないときでも、それを使う可能性が大いにある。」

顕著な一例として、少なくとも 57 丁の半自動ライフル（ほとんど M-16 と M-14）を受け取ったジョージア州グウィネット郡がある。この郡の SWAT 出動の 3 分の 1 は、麻薬の摘発に用いられたが、その半数において SWAT チームは屋内に入るのにドアを破壊した。しかし「どんな報告にも武器が見つかったという記録はなかった。」

他の例として、コンコード、キーン、マンチェスターという互いに接近した、ニューハンプシャーの町の場合がある。これらの町は接近しているにもかかわらず、それぞれが米国土安全保障省（DHS）の助成金を得て、軍隊級の装甲車“ベアキャット”を購入した。こ

のような車両が必要と認められたということは、大量殺戮の兵器を必要とするテロリズムの脅威があることを示している。

例えば、キーンの警察署の提出した申請書には——これはオハイオ州立大の、サッカー大会中の“プレゼンス”のための装甲車も顔負けだが——年中行事のカボチャ祭りがテロの目標にされる可能性があり、APCの力が必要と書かれていた。

軍隊流の精神構造が警察にも浸透

米軍の海外での軍事行動から受け継いだもう一つのものは、米兵が敵国で生き残るための奇妙な軍隊式精神構造である。装甲車が、ふだんなら静かな街路樹のある通りを巡回している光景と同じくらい不安にさせるものは、地方の警官たちが軍隊式の戦闘訓練を受けている光景である。



米司法省は、新兵訓練の条件を用いて、新しい警察官を訓練していると説明している。

司法統計局報告によれば、「新入警察官の大多数は、学校で、ストレスをベースにした軍隊的方向付けの訓練を受けるという。これは問題だ。いったいこの、若い警官に戦闘の準備をさせる軍事モデルは、我々のお巡りさんたちに共同体の信頼を得させ、市民と一緒にあって、犯罪や公共の秩序の問題を解決させるための適切な方法だろうか？」

その結果として、地方警察の内部にいわゆる「戦士」的精神構造が「広く浸透し、人質事

件や学校射撃事件とはかけ離れた、共同社会との警官の日常的な交流にまで沁み込んでいる」と報告は言っている。

この報告は、すべての“緊急事態対応チーム”要員向けの、「戦士の心構え/化学軍需品」(Warrior Mindset/Chemical Munitions) というタイトルの、ノースカロライナ州ケアリーの SWAT チームに見せた、パワーポイント授業を紹介している。

「国家戦略担当者会」(? National Tactics Officers Association) —そのウェブサイトによれば、「我々のメンバーに、ますます危険になる社会を守るために必要な道具を与える」人たち——は、訓練を受ける者たちに、「戦闘的精神を鋼のように鍛えよ」と言い、「戦闘的精神」を、「勇気をもって戦うとき、恐怖と逆境に耐える戦士の内なる強さである。それは耐えて勝つ意志、復元力である」と定義している。

しかし問題は、警察活動のそのような考え方が、アメリカの道路上に平和を創りだすことに貢献するか否かである。警察活動が歪んだ形にエスカレートすることが、市民権グループの間で高まりつつある心配のタネである。

この調査の結果、SWATのミッションの62%が麻薬捜査だったことがわかった。その約79%が個人宅の急襲であり、同じくらいの割合が捜査令状による捜査だった。しかし事件の7%は、人質とか射撃事件のような、SWAT が本来扱うように考えられていたカテゴリーに入った。

このような過剰な火力を伴った軍隊的な精神構造こそが、多くのアメリカ人共同体を正真正銘の火口(ほくち)に変えてしまうもので、それはほんのわずかの刺激で、無意味な暴力や死に発展する。

この調査は、全体的傾向のほんの一部を示すだけだが、それでも SWAT ユニットの出勤に巻き込まれて民間人が死んだ、7つの例を報告している。そのうち2つは自殺と考えられる。別の46人が負傷しており、その多くは隊員による物理的力の結果である。